


京都国立近代美術館 収集の概要（令和5年度）

京都国立近代美術館は、関西さらには西日本において近現代の美術・工芸を扱う中心的な機関として活動することを目的とし、地域性に目配りしつつも、日本の近現代美術史の核となる作品や、代表的作家の各時代における重要作品を積極的に収集している。さらに、世界における日本の美術・工芸の位置づけを常に考えることを旨とし、その影響関係に係る国外の近現代美術の収集にも取り組み、加えて収蔵作家のジェンダーバランスにも配慮するよう努めている。

令和5年度も以上の方針を踏襲し、多様なジャンルの作品を収集した。中でも、キュビズムの画家であり、理論家でもあったアルペール・グレーズの油彩画《キュビズムの風景、木と川》は、分析的キュビズムからさらに抽象度の高い画風へ移行する過渡期の作品であり、美術雑誌『デア・シュトルム (Der Sturm)』(1910-32年)の1920年10月号にフルカラー図版で掲載されたという点でも重要な作品である。また、国画創作協会の創立会員だった野長瀬晩花の代表作《休み時》は、国画創作協会第2回展に出品されたのち長らく行方不明となり、1993(平成5)年に当館と東京国立近代美術館で開催された国画創作協会回顧展の際に再発見されたが、その後再び行方不明となり、このたび約30年ぶりに再発見されたものである。その他、版画、陶芸、染織の作品を購入し、コレクションのさらなる充実化を図った。

充実化重点領域となっている現代作家の作品としては、栗木達介の作品9点のほか、松本陽子やAKI INOMATAのような女性作家の活躍にも注目し作品を購入した。

京都国立近代美術館 美術作品購入一覧（令和5年度）

 = 特別予算購入

1	種別：陶芸 作者名：加藤清之（1931～） 作品名：花器 制作年：1961 材質・形状：陶器 寸法：45.0(h)×110.0×20.0cm 解説：絵画制作で培った表現のあり方を陶器の表面に応用することを試みていた加藤清之の最初期の作品。赤土による扁平な舟形の器形に白化粧を掛け、その表面を掻き落として白と赤のコントラストによって模様を表現している。幾何学的抽象ともいえる線的なイメージが確かな構成力によって表現されている。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
2	種別：陶芸 作者名：加藤清之（1931～） 作品名：作品01-IS 制作年：2001 材質・形状：陶器 寸法：86.5(h)×41.0×22.0cm 解説：素材の黒土を扁平な方形となるように指跡を残しながら紐づくりで立ち上げ、輪郭もきれいに均すことなく無造作に仕上げている。表面は棒で引っかいたり、身近な道具を押し当てたりして即興的に抽象文を表し、その箇所には黒土との対比が際立つように白化粧を施している。本作は加藤清之が日本の現代陶芸を代償する作家としての評価を確立して以降の代表作の一つである。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
3	種別：染織 作者名：芹沢銈介（1895～1984） 作品名：型染いろは六曲屏風 制作年：1958 材質・形状：麻布、型染 寸法：171.5(h)×279.0cm 解説：「いろは」の47音を図案化した芹沢銈介を代表する図柄の屏風。模様は各文字とそれぞれの文字を頭文字として抱く図柄1点が組となって表される。屏風は矩形を基本とすることや折り曲げることから生まれる固有の立体感、各面の分節の効果などが、「型絵染」という、絵画的な模様表現を得意とした芹沢の創造力を刺激した表現媒体である。 取得額：5,000,000円 展示予定：今年度のコレクション展で展示予定
4	 種別：日本画 作者名：野長瀬晩花（1889～1964） 作品名：休み時 制作年：1919 材質・形状：屏風(二曲一双)／麻布着色 寸法：(各)181.8×186.8cm 解説：作者によれば、江戸川のあたりを散歩した折に川の畔に休んでいる農夫の姿を面白く思ったことをきっかけとして、京都の広沢の池などに取材し、人生の平和を写そうとした構想画だという。本作品は、発表後長らく行方不明状態にあり、モノクロ図版で知られるのみであった。1993(平成5)年に当館と東京国立近代美術館で開催された国画創作協会を回顧する展覧会で久しぶりに世に出るも、その後再び行方不明となり、昨年約30年ぶりに発見されたものである。 取得額：38,500,000円 展示予定：「京都画壇の青春」展（2023年10月13日～12月10日）にて展示済

5	種別 : 日本画 作者名 : 畠中光亨 (1947~) 作品名 : 青色青光 (問頭)、黄色黄光 (駆走)、赤色赤光 (跳踊)、白色白光 (合掌礼)、緑色緑光 (山水)、黒色黒光 (流灯) 制作年 : 2020~2021 材質・形状 : 屏風(二曲六隻) / 紙本着色 寸法 : (各) 170.0×170.0cm 解説 : 本作品は、阿弥陀経の中の「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」という言葉をモチーフとしており、その意味は、それぞれにそれぞれの美しく輝く光を持っている、というもの。畠中らしい、鮮やかな天然顔料による色彩の画面上を、勁くしなやかな描線で描かれた女性たちが生き生きと活動し、祈り、憩う。 取得額 : - 展示予定 : 将来的にコレクション展にて展示予定
6	 種別 : 油彩画 作者名 : アルベール・グレーズ (1881~1953) 作品名 : キュビズム的風景、木と川 制作年 : 1914 材質・形状 : 油彩画布 寸法 : 97.0×130.0 cm 解説 : 本作品は、グレーズが分析的キュビズムからより平面的で抽象度の高い作風へと変化する過渡期に描かれた。画面中心には樹がそびえ、背景右手には工場と思われる建造物が建ち並び、それらを迂回するように灰色の川の流れるが認められる。画面は対角線上の堅固な構図をもつもの、そこに色鮮やかな方形や円形が複数の視点からリズムカルに配されることで、風景の力強い息吹が表されている。 取得額 : 492,800,000円 展示予定 : 2024年度 第1回コレクション展
7	 種別 : 染織 作者名 : 来野月乙 (1924-2005) 作品名 : 争鳥 制作年 : 1962 材質・形状 : 画仙紙、カラーインク、顔料、臈染 / 屏風 (二曲一隻) 寸法 : 158.0×177.0 解説 : 1962 (昭和37) 年の第1回日本現代工芸美術展で現代工芸賞を受賞した来野月乙の初期の代表作。この時期の来野は鳥のイメージを作品化した一連のシリーズを手掛けている。二羽の鳥が空中で争っている様が臈染の手法で抽象的に表現された本作もその一つである。 取得額 : 3,300,000円 展示予定 : 次年度以降のコレクション展で展示予定
8	 種別 : 染織 作者名 : 三橋 遵 (1954-) 作品名 : 思い出の向こう側 制作年 : 2016 材質・形状 : シルクオーガンジー、木、ネオジウム、酸性染料、アクリル絵具、ぼかし染め、木造形、その他 / 三対 寸法 : (各) 200×110 解説 : 本作は2016 (平成28) 年に開催した個展 (松ヶ崎松雲荘、京都) のために制作された作品である。シルクオーガンジーを黄色の地と緑の斑点とに染め分け、そこに布地を挟むようにマグネットに取り付けられた人物像がランダムに配される。記憶の揺らぎや時空を超える感覚が表現された作家の代表作である。 取得額 : - 展示予定 : 次年度以降のコレクション展で展示予定
9	種別 : 染織 作者名 : 森口華弘 (1909 - 2008) 作品名 : 友禅訪問着 花の泉 制作年 : 1971 材質・形状 : 絹、友禅 寸法 : 163.0×128.0 解説 : 菊花一輪を大胆に拡大して意匠化した、右袖から左裾へと細長い二等辺三角形が直線的に広がっていく (あるいは逆に収斂していく) 構図の作品。森口華弘は蒔糊のイメージが強いが、本作のように模様の単位と密度、色彩をコントロールすることで錯覚を起こさせ、意匠に動きを生み出す手法も得意としている。本作はこの手法による作家の代表作である。 取得額 : 5,500,000円 展示予定 : 次年度の企画展で展示予定

10	種別 : 染織 作者名 : 森口華弘 (1909 - 2008) 作品名 : 友禅訪問着 彩華 制作年 : 1985 材質・形状 : 絹、友禅 寸法 : 164.0×128.0 解説 : 蒔糊と大胆な構図、モチーフを模様化する手法において、現代友禅を確立した華弘の魅力が凝縮した作品。匂い立つような満開の紅白梅をモチーフに意匠構成がなされているが、右肩に伸びた梅の幹を境として淡い臙脂と白場が片身替わりとなる。糸目による輪郭線と染めた箇所と染め残した箇所の対比とバランスが、作品により一層の華やかさを与えている。 取得額 : 5,500,000円 展示予定 : 次年度の企画展で展示予定
11	 種別 : 陶芸 作者名 : 栗木達介 (1943-2013) 作品名 : 碗のモニュメント 制作年 : 1968 材質・形状 : 陶土、木、手びねり 寸法 : 70.0×24.0×24.0 解説 : 大学を卒業して2年目の若い栗木が第7回日本現代工芸美術展に出品した作品。台形の木の台に同手の碗形を五つ積み上げた形状で全面に黄釉がかかる。幾何的形態と有機的形態の関係を碗のイメージにおいて探求したもので、作家初期の思考のあり方がよく現れている。 取得額 : 1,200,000円 展示予定 : 次年度以降のコレクション展で展示予定
12	 種別 : 陶芸 作者名 : 栗木達介 (1943-2013) 作品名 : 碑 GENROKU 制作年 : 1969 材質・形状 : 陶土、木、手びねり 寸法 : 92.5×26.2×17.5 解説 : 第7回日本現代工芸美術展の出品作。前年に発表した《碗のモニュメント》同様に五つのパーツが木の台に積み重ねられている。作品では、碗の断面の輪郭を利用しながらやきものにおける伝統的な色と装飾の関係を問かけると同時に、ダミと呼ばれる伝統的な絵付け技法を意識化させるために、面的に施した顔料をあえて滲ませている。 取得額 : 1,200,000円 展示予定 : 次年度以降のコレクション展で展示予定
13	 種別 : 陶芸 作者名 : 栗木達介 (1943-2013) 作品名 : 積まれた五つの形 制作年 : 1971 材質・形状 : 陶土、石、手びねり 寸法 : 177.5×60.0×60.0 解説 : 第9回朝日陶芸展で朝日陶芸大賞を受賞した作家の記念作。この頃の栗木作品に顕著にみられる同形のパーツを複数点関係づけていく手法による。本作では有機的なふくらみを持つ形状を基本として、それぞれの膨らみと窪みを関係づけながら積み上げていくと同時に、黒釉と銀彩による装飾によって形態個々の特性が視覚的に強調されている。 取得額 : 5,500,000円 展示予定 : 次年度以降のコレクション展で展示予定
14	 種別 : 陶芸 作者名 : 栗木達介 (1943-2013) 作品名 : 歩行する鞍態 制作年 : 1976 材質・形状 : 陶土、手びねり 寸法 : 40.0×45.0×48.0 解説 : 焼成時に窯の中で土が縮んだりゆがんだりして動く様を「這う」あるいは「歩行」するイメージに転換して制作された一連の作品の一つ。本作は「歩行」の象徴である鞍を基本形態として、膨らみと窪み、曲線と直線の関係性において造形されている。また、焼成後の形態の動きを前にして、その動きを視覚化させるために、黒釉の地に上絵で赤い色彩が面的に施されている。 取得額 : 4,500,000円 展示予定 : 次年度以降のコレクション展で展示予定

15		種別：陶芸 作者名：栗木達介（1943-2013） 作品名：黒釉銀緑彩蓋器 制作年：1978-9年 材質・形状：陶土、手びねり 寸法：7.0×32.0×32.0 解説：第7回中日国際陶芸展に招待出品された作品の姉妹作。栗木は部分と全体との関係を現わすために一時期「蓋物」を頻繁に制作していたが、本作はそのうちの1点である。身と蓋を有機的なふくらみにおいて関係づけ、さらに有機的な形態の複雑さを意識させるために揺らぎを伴う銀彩による帯状の装飾が入れられている。 取得額：2,800,000円 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
16		種別：陶芸 作者名：栗木達介（1943-2013） 作品名：銀緑彩文方陶 一号／銀緑彩文方陶 二号／銀緑彩文方陶 三号 制作年：1982 材質・形状：陶土、手びねり 寸法：一号：9.0×30.0×30.0二号：9.0×30.0×30.0三号：8.0×33.0×34.0 解説：「傾き」をテーマとした3点組の作品。栗木は陶磁器固有の形態感を追求する中で傾きや曲がりをテーマに制作していた時期がある。こうしたテーマによる同シリーズの他作品は器物形態における土の積み上げ方の変形として傾きが表現されるのに対して、本作ではいわゆる「オブジェ」として純粹に傾きのバリエーションが装飾との関係において追求されている。 取得額：3,000,000円 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
17		種別：油彩画 作者名：松本陽子（1936-） 作品名：作品IV 制作年：1964 材質・形状：油彩画布 寸法：130×162 解説：1960年代の初期の油彩画で、褐色や水色で下地を覆った上から、ローラーを用いて青・白・赤の色面を大胆に配置し、テクスチャーの対比によって重層的な効果を生んでいる。画面中央下に置かれた二つの黒い丸は、当時の松本の絵画にしばしば登場する要素である。絵の具の垂れやローラーによる制作手法では、手のコントロールから逃れることが模索されており、手探りの状態で抽象絵画に取り組んだ活動初期の制作の様子がうかがえる。 取得額：- 展示予定：将来的にコレクション展にて展示予定
18		種別：油彩画 作者名：松本陽子（1936-） 作品名：作品V 制作年：1965 材質・形状：油彩画布 寸法：130.5×194.5 解説：1960年代の初期の油彩画で、ピンク、グレー、褐色、白など後年の松本の作品に登場する色彩が用いられ、色面同士の境界を曖昧にしたり、白の線を描きこむなど、『作品IV』から新たな展開がみられる。画面右上の二つの黒い丸が、アンカーのように画面全体に緊張感を生んでいる。 取得額：- 展示予定：将来的にコレクション展にて展示予定
19		種別：油彩画 作者名：八田 豊（1930-） 作品名：作品65-BB（トロンロン） 制作年：1965 材質・形状：水性塗料、パルプボード 寸法：162.5×122.0 解説：八田は1960年代半ばから、白で地塗りを施したパルプボードに多数の円の軌跡を規則的に積み重ねるように線刻した「カーヴィング」と称した技法によって、独自の絵画表現を見出していく。本作もそのシリーズの一つで、シンメトリカルな構図が多い中、本作では画面下から上へと旋回するように円形が連続的に線刻されており、躍動感を生み出している。 取得額：- 展示予定：将来的にコレクション展にて展示予定

20		<p>種別：油彩画</p> <p>作者名：柏原えつとむ (1941-)</p> <p>作品名：Silencer 68-4</p> <p>制作年：1968</p> <p>材質・形状：水性ペイント、画布</p> <p>寸法：162.1×130.3</p> <p>解説：《Silencer》は、1967（昭和42）年から1968年にかけて制作された、遠近法と錯視性の問題を扱ったシリーズ。開口部がこちらを向いた箱状のモチーフが透視図法の消失点の位置に配され、白を基調にしながら、さまざまなバリエーションがある。本作では青・白・グレーの色面の配置によって画面に三次元的な奥行きが生まれ、錯視的效果を生んでいる。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：将来的にコレクション展にて展示予定</p>
21		<p>種別：その他</p> <p>作者名：ザ・プレイ (1967結成)</p> <p>作品名：《7DIMENSIONS：ハロゲン化するプレイ氏の触媒調合あるいは12090帯での追跡計画》関連資料</p> <p>(1) 記録写真 (2) メンバー用プラン（池水慶一の書込みあり） (3) 美術館の診療行為（鈴木芳伸による黒十字） (4) 1969年「現代美術の動向」展出品者用リボンバッジ (5) 『PLAY』誌（黒本）</p> <p>制作年：1969</p> <p>材質・形状：写真、印刷物、冊子等</p> <p>寸法：-</p> <p>解説：主に屋外でのハプニングを中心としていたザ・プレイは、京都国立近代美術館の当時研究官であった乾由明の依頼により、1969（昭和44）年の「現代美術の動向」展に参加し、会期中の毎週日曜日に7回にわたってハプニングを行った。大まかな流れを当時メンバーだった水上旬が構想し、「ハプニング或いは思考の拠点」（池水）として十字形の白布を館内各階中央及び前庭中央に置き、各メンバーがさまざまな行為を行うという内容であった。記録写真には、美術館の前庭に白布が敷かれ、そこで儀式を行う様子や白線を引く姿、ピンク色の衣服を着たメンバーがジョウロで水をまく姿などが写されている。メンバーの鈴木芳伸が制作した黒十字の紙片は、展示壁面や館内各所に貼り付けるために用いられた。またハプニング中に学生の乱入騒ぎがあり、その顛末を報告した高橋亨のレビューが残されている。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：将来的にコレクション展にて展示予定</p>
22		<p>種別：その他</p> <p>作者名：AKI INOMATA (1983-)</p> <p>作品名：やどかりに「やど」をわたしてみる</p> <p>制作年：2016</p> <p>材質・形状：HD ヴィデオ（約6分）</p> <p>寸法：可変</p> <p>解説：〈やどかりに「やど」をわたしてみる〉は、世界各国の都市建築をモチーフにした3Dプリンター製の透明の「やど」と、それらの「やど」にヤドカリが移り住む様子をうつした写真・映像からなるシリーズである。すべてのメディアを含むインスタレーションとしても、一点ずつの個別展示としても展示することが出来る。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：2024年度「LOVEファッション」展にて展示予定</p>
23		<p>種別：その他</p> <p>作者名：AKI INOMATA (1983-)</p> <p>作品名：やどかりに「やど」をわたしてみる-Border-（ニューヨーク2）</p> <p>制作年：2019</p> <p>材質・形状：3Dプリント、樹脂</p> <p>寸法：7.2×7.8×4.8</p> <p>解説：〈やどかりに「やど」をわたしてみる〉は、世界各国の都市建築をモチーフにした3Dプリンター製の透明の「やど」と、それらの「やど」にヤドカリが移り住む様子をうつした写真・映像からなるシリーズである。すべてのメディアを含むインスタレーションとしても、一点ずつの個別展示としても展示することが出来る。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：2024年度「LOVEファッション」展にて展示予定</p>
24		<p>種別：その他</p> <p>作者名：AKI INOMATA (1983-)</p> <p>作品名：やどかりに「やど」をわたしてみる-Border-（ライヒスターク）</p> <p>制作年：2016</p> <p>材質・形状：3Dプリント、樹脂</p> <p>寸法：4.5×11.5×3.5</p> <p>解説：〈やどかりに「やど」をわたしてみる〉は、世界各国の都市建築をモチーフにした3Dプリンター製の透明の「やど」と、それらの「やど」にヤドカリが移り住む様子をうつした写真・映像からなるシリーズである。すべてのメディアを含むインスタレーションとしても、一点ずつの個別展示としても展示することが出来る。</p> <p>取得額：-</p> <p>展示予定：2024年度「LOVEファッション」展にて展示予定</p>

ほか10点／計34点 購入総額：607,127,350円